

青磁筆架について

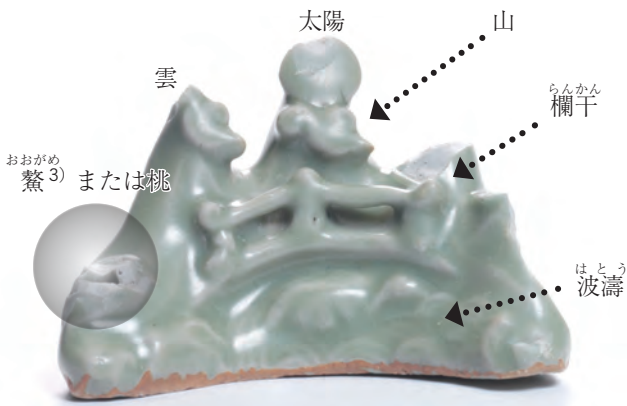
筆架は文字を書いたり絵を描いたりする際に、筆を置くための台として使用されていました。中世において「文房四宝」と言われる筆・硯・墨・紙の傍にあり、水滴^{すいてき}¹⁾や硯屏^{けんびょう}²⁾などとともになされた嗜好性の高い文房具です。

北竹ノ下Ⅰ遺跡で出土した筆架は青磁製であり、龍泉窯青磁は、中世を通して日本に輸入されている代表的な中国陶磁器です。筆架はその特徴から15世紀に製作されたものとみられ、生産地である中国での出土も限られる珍しい焼き物です。

中国では宋代になると文人達を中心に、文房具を実用品としてだけではなく、鑑賞するものとしても扱うようになっていくようです。そのため文房具には文人たちの好む意匠が施されるようになったと考えられます。北竹ノ下Ⅰ遺跡から出土した筆架にも様々な意匠が施されており、いずれも昇官や科挙（官僚試験）合格を祝う吉祥、山水表現などで構成されています。

【註】

- 1) 墨を擦る際、使用する水を入れておく容器
- 2) 硯にほこりが入るのを防ぐ衝立型の道具
- 3) 中国神話に登場する大海亀



筆架の部位と意匠

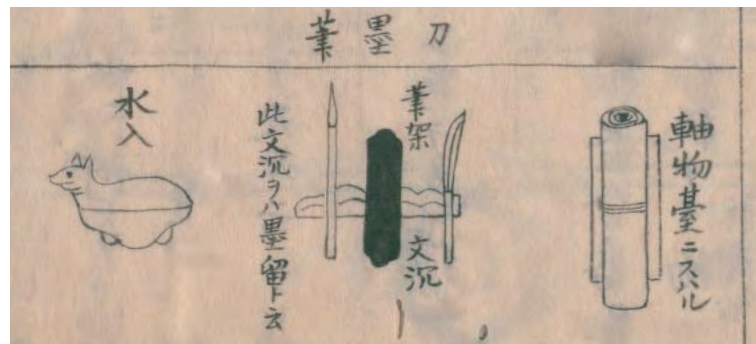
青磁筆架の所有者

これまでのことをまとめると、筆架は室町時代に中国より輸入されたものであり、希少性が極めて高く、入手できる者は限られていたと考えられます。

『君台観左右帳記』にも記載があるように、室町将軍家のような階層において使用されていることが確認でき、また、筆架の出土した井戸から茶道具の出土もみられたことから、筆架の所有者は、単に識字層であるだけではなく、書や絵画を嗜み、文房具にもこだわりを持つ文化的水準の高い武家か僧侶のような有力者であった可能性が考えられます。

当時、北竹ノ下Ⅰ遺跡をとりまく周辺にも様々な有力者が存在していたことが文献などからうかがえます。伊予国守護河野家の中でも特に重要な家臣の一つに挙げられ、象ヶ森城に入城していたとされる櫛部氏などの武家や、上市に所在し、臨濟宗（東福寺派）に改宗することで再興をはかった新居氏の氏寺である観念寺、伊予国安用名地頭職を安堵された撰津頼秀の妻である尼寿円といった禅宗に関連する僧侶などが存在したとみられますが、これまでの発掘調査では、所有者を特定できる発見には至っていません。

現段階では未だ不明な部分が多いと言わざるをえません。これからも道前平野の農地整備に伴う発掘調査は続きますので、今後、北竹ノ下Ⅰ遺跡を含めた周辺地域の中世期の様相が解明されていくことで筆架の持ち主に迫ることができるようになるかもしれません。



『君台観左右帳記』（異本）（東京国立博物館）を一部拡大

西条市安用

北竹ノ下Ⅰ遺跡

青磁筆架 速報展



筆 日野楠雄氏提供

遺跡の概要

きたたけのしたいち いしのべ やすもち
北竹ノ下 | 遺跡は西条市石延から安用に所在する遺跡で、平成 30 年度より道前平野農地整備事業に伴う発掘調査を行っています。

遺跡は西方の高縄山系東三方ヶ森の山麓部から、緩やかに傾斜する新川扇状地の扇央部分に立地しています。

これまでの主要な発掘調査の成果として、平成30年度の調査では、県内でも確認例が少ない古墳時代以前の水田跡が見つかり、令和元年度の調査では、弥生時代の終わりから古墳時代初め頃にかけてのまとまった集落跡や、中世の集落跡と国内初となる青磁製筆架が確認されたことが挙げられます。

今まで発掘調査があまり行われていなかったこともあり歴史的に不明な部分も多かったこの地域に、2年間の調査によって、縄文時代から近世という長い期間に渡って広い範囲に人の営みがあったことがわかってきました。

道前平野農地整備事業に伴って遺跡の発掘調査は今後も続いていきますので、これからも多くの成果が得られ、地域の歴史が少しずつ解明されていくことが期待されます。



調査区の配置と各時期の遺跡の広がり

筆架はどこから出土したか

※背景画像『一遍聖絵』(模本)(東京国立博物館所蔵)を一部拡大



- 凡例
- 15 世紀の遺構
 - 15~17 世紀初頭の遺構
 - 遺構のまとまり

筆架は 8 区と呼んでいる調査区から出土しました。15 世紀には屋敷地を区画すると考えられる方形区画溝が存在し、15 世紀から 17 世紀初頭にかけての井戸などが見つっています。筆架はその井戸の中から出土しました。

北竹ノ下 | 遺跡 8 区の遺構配置図



8区全景



調査区北東部の方形区画溝



筆架出土状況



井戸の石積み